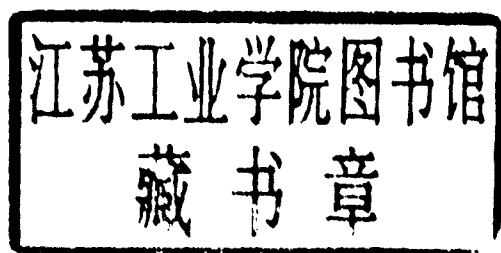


和漢比較文學の周辺

和漢比較文学会編

和漢比較文学叢書第十八卷



汲古書院

和漢比較文学叢書 第十八卷 (第2回配本)

和漢比較文学の周辺

平成六年八月三十一日発行

編集 和漢比較文学会
発行者 坂本健彦
整版印刷 中台整版

発行 汲古書院

一〇二東京都千代田区飯田橋二一五―四
電話 〇三(三三六五) 九七六四
FAX 〇三(三三二二) 一八四五

©一九九四

ISBN 4-7629-3242-6

和漢比較文学の周辺 目次

和漢比較文学叢書第十八卷

中国古典文学と日本の文献.....	坂田	新	3
『香字抄』の引用書について.....			

——和書を中心にして——.....	米山	敬子	19
-------------------	----	----	----

異体字同定上の問題点.....	西原	一幸	41
-----------------	----	----	----

日本に伝来した類書とその効用.....	朽尾	武	57
---------------------	----	---	----

中国故事の古層と新層

——『類林』系類書と『蒙求』をめぐる問題について——.....	相田	満	81
---------------------------------	----	---	----

『遊仙窟』注の世界

——有注本のなりたちをめぐる——.....	柳瀬	喜代志	101
-----------------------	----	-----	-----

教訓抄を通してみた平安朝の舶載楽書に就いて

——『醉郷日月』『律書斎図』を中心にして——.....	宮崎	和廣	121
-----------------------------	----	----	-----

『西遊記』受容史の側面.....	堀	誠	139
------------------	---	---	-----

俳句と漢訳・漢詩・漢俳.....	李	鈴木義昭	161
------------------	---	------	-----

中国における日本古典文学の翻訳と研究（続）.....	坪井	佐奈枝	185
----------------------------	----	-----	-----

造寺供養願文の世界

- 『本朝文粹』卷十三所収「為左大臣供養淨妙寺願文」を中心に——……………細田季男 205
- 慶應義塾図書館蔵『性靈集略注』（翻印）……………佐藤道生 223
- 和漢比較文学叢書（第二期）の刊行を終えて

和漢比較文学の周辺

中国古典学と日本の文献

坂 田 新

一

かつて中国の読書人の間で、かの徐福東渡説から遠く糸を引いて、日本にあるいは秦の始皇帝による焚書坑儒以前の全き経書が伝わっているやもしれぬという囁きがなされていた。欧陽修が「居士外集」に収める「日本刀歌」に、

徐福行時書未焚

徐福行りし時 書 未だ焚けず

逸書百篇今尚存

逸書百篇 今 尚ほ存す

令敵不許伝中国

令敵しくして中国に伝ふるを許さず

举世無人識古文

举世 人の古文を識るもの無し

先王大典藏夷貊

先王の大典 夷貊に藏するも

蒼浪洪蕩無通津

蒼浪 洪蕩として 津を通ずる無し

と詠じていることは、よく知られていよう。

南宋に入つて、多くの経書に新たな注を加えた朱子が、ひとり『尚書』については成書を得なかつたことに關して、明の都穆『聽雨紀談』(叢書集成初編)所収「統知不足齋叢書」本)、「朱子不注尚書」の条に曰わく、

朱子、経伝に於いて多く訓釈する有り。惟だ尚書のみは則ち否^{しかぜ}ず。蓋し錯簡脱文多く、古文の全きに非ざるを以てならん。(中略)或るひと謂ふ、日本国に真本尚書有り、乃ち徐福が海に入るとき携へし所の者なり、と。予、初め未だ之を信ぜず。後、歐陽公が「日本刀詩」を觀るに、「徐福行時書未焚、逸書百篇今尚存、令嚴不許伝中国、举世無人識古文、先王大典藏夷貊、蒼浪洪蕩無通津」、と云へる有り。則ち外国に真に其の本有る、歐陽公の言、未だ必ずしも掘無きにあらず。朱子の注せざりしは、豈^あいは是^{こゝ}を以てならんか。

「日本国に真本尚書有り」。この噂はかなり広まっていたとみえて、清朝に至るまで諸書に議論がなされている。こうなると、経書の文化圏に育つて中国の文史に嗜^{えしな}みのある者が、たまさか日本に來航の折があらば、まず『古文尚書』旧本の有無を問いただしたくなる。寛政年間刊行の『坐間筆語』に附載する「江関筆談」は、正徳二年十一月五日、朝鮮通信使と新井白石との筆談記録であるが、次のようなやりとりがあった。(原漢文)

南岡(従事官李邦彦の号)曰はく、貴邦、先秦の書籍独り全きの説、曾て六一(歐陽修)が「鏞^{しゅうたう}刀の歌」(日本刀歌)に於いて之を見る矣。今に至るも猶ほ或いは一二の流伝せる有らんか、と。

白石曰はく、本邦の出雲の州に大神の廟有り、俗に之を大社と謂ふ。嘗て聞く、神庫に藏する所の竹簡漆書、蓋

し古文尚書ならんと云ふ、と。

始皇帝焚書以前の面目を備えた真本『古文尚書』は、こうして多くの読書人に期待されたが、ついに日本での発見はならなかった。新井白石が胡亂に答えている出雲大社の「竹簡漆書」も、その後は確とした情報を聞かない。ただ、『古文尚書』のあては外れたものの、『宋史』卷四九一外国伝の日本の条には、「其の国、多く中国の典籍有り」と記し、宋初に渡海した後の東大寺別当裔然によって、二種の『孝経』がもたらされたことを述べている。一は後漢の鄭玄の注、一は唐の越王李貞の名のもとに任希古等が撰定した『孝経新義』だという。その頃の中国でこの二種の『孝経』注を見ることはもはや難しくなっていたようで、日本が「多く中国の典籍有り」と称されても、当時すでに誇大の言ではなかったのである。

いま、どれか一冊の「中国文学史」課本を開いてみた時、そこに列挙されている作品名の中で、中国では早くに散佚して日本にのみ伝わっていたもの、あるいは日本ではさまで珍しくはないが中国では稀観の書に属していたりするものが、必ずといってよいほど数種類は眼につく。『遊仙窟』がそれであり、「三言二拍」などもその類である。『金瓶梅』を解説するとなれば、いわゆる「詞話本」系統のテキストに言及するのは当然のことで、『新刻金瓶梅詞話』と題するその主要な刊本は日光山輪王寺慈眼堂蔵本と徳山毛利氏栖息堂蔵本であった。

『遊仙窟』以下、これらの書物はいずれも中国文献の日本に流伝残存するものが近代での再認識を経て、あらためて中国古典学の発展に寄与した顕著な事例である。しかし、「日本の文献」という場合に、単に禹域に遺佚した書物を遠く東夷の地に拾い得たことのみを指すのでは、その範圍を余りにも狭くしすぎているし、事実、中国の古典学に寄与し得る本邦の文献は、より広く種々の形で求められる。以下、あらましの類別を分つて、時に過去の事例のいさ

さかを述べ、時に将来の展望のいささかをも語ろう。

二

「日本の文献」のその一は、やはりまず中国に失われて日本にのみ残る典籍である。尙然が日本から持ち渡った二種の『孝経』について、『宋史』がことさらに記述を惜しまなかったことは、当時その書が宋朝の士人間でそれなりの話題となったからに違いない。そうした事例を見るにつけても、それならば日本に残存する中国での佚書を集成してみようという動きが出てくるのも当然であろう。徳川幕府で大学頭^{だいがくのかみ}に任じている林述斎が主編者となって、寛政十一年以来刊行されてきた「佚存叢書」百十卷六十冊がそれである。

漢の孔安国伝『古文孝経』一卷をはじめとする「佚存叢書」所収の典籍が、やがてこの叢書が清朝に伝わって後、彼の地での「知不足齋叢書」や「粵雅堂叢書」に採録されてゆくのは、それらがいずれも中国古典学にとって有用の書物であることを語っている。もっとも、この言い方はいささか本末転倒の嫌いがある、はじめから林述斎としては、古典学有用の稀覯書であって一旦公刊されたならば清朝の学界でも評判を呼びそうな典籍を取り揃えたのである。それというのも、日本にあって遙か清朝の学者をも拝跪させるほどの学問的事業としては、その一つの有力な方途として、日本にのみ残存する古書群を刊印することが思い浮かぶからであった。事実、その最も成功した先例が述斎の眼前にあった。

荻生徂徠に学んで伊予西条藩に召し抱えられていた山井崑崙が、足利学校の蔵書を用いて経書の校勘を行うために下野に至ったのは享保七年のことであった。崑崙は享保九年まで同地に留まり、校経の成果は稿本『七経孟子考文』

としてまとめられた。崑崙その人は上梓を見ぬままに享保十三年に世を去ってしまったが、やがて徂徠の弟である荻生北溪が稿本に補遺を加え、享保十六年には『七経孟子考文補遺』と題して刊行される。その書は將軍吉宗の主旨によって中国に送られ、しだいに清朝経師の注目を集めるようになった。それは崑崙の校語がいたって精到であるのもさることながら、拠るところの諸本が多く日本にのみ伝存する古本であることにも目をみはったであろう。清儒間のこの書の評価は狩野直喜氏「山井鼎と七経孟子考文補遺」（『支那学文藝』所収）に詳しい。

かくして『七経孟子考文補遺』は「四庫全書」にも収められることとなり、あわせて撰進された『四庫全書総目提要』でも解題が添えられるが（巻三十三）、中国で見ることのかなわぬ「足利の古本」なるものについて、「按ずるに、称する所の古本は、唐以前、博士の伝ふる所と為し、足利本は乃ち其の国足利学印行の活字版にして、今みな信を考ふべき無し」などと、解題者は必ずしも満腔の信を置かぬかの口振りではあるが、それら日本の古書がしばしば古えの面目を備えていることだけは認めねばならなかった。

『七経孟子考文補遺』と似たような経緯で、清朝に逆輸入されて彼の地の儒林をにぎわし、同じく「四庫全書」に採録されたものに、太宰春台が校刻した『古文孝経孔氏伝』、および根本武夷による皇侃『論語義疏』がある。山井、太宰、根本の三者がいずれも徂徠門下であることは興味深いが、それぞれの書物がちやうど輯佚校勘をきわめて重視する清朝考証学の好尚とあい称^{かな}ったがゆえに清儒の尊重をかちえたのもあろうし、それはまた一面、護^{けんえん}園の学問が清朝考証学を先取りしていたと評される所以^{ゆえん}でもある。

林述斎は「佚存叢書」を編むにあたって、前輩となる山井崑崙らの仕事を熟知していた。『七経孟子考文補遺』のことは「佚存叢書」本『古文孝経』孔安国伝跋で批評しているし、太宰春台のことも、春台がかつて美濃岩村侯の世子に仕えていた経歴からして、十分な知識を持っていたであらう。述斎は岩村侯の一門で、学問を買われて林家第八

代を継いだのであった。そして、述斎はすでに『四庫提要』も目にしていて、『佚存叢書』所収『泰軒易伝』『唐才子伝』などの跋文で『四庫提要』に言及する、山井らの書物の清朝での評判についても、かなりの確に理解していたに違いない。しかも、自らは今や一藩儒に過ぎなかった山井崑崙らとは異なり、天下の文教をつかさどる大学頭である。そこで、前輩のひそみにならって、斯学^{しがく}に有用となる佚存書を、その地位にふさわしい規模で集成しようとしたのであった。また後年、述斎の周囲では「佚存叢書」に幾らかは示唆されるところがあったのか、『全唐詩』の遺佚を集めた市川寛斎の『全唐詩逸』が編まれている。その書に序文を書いたのも林述斎であった。

段玉裁の外孫として生まれ、清朝考証学とはかなり近縁の場所にいる龔自珍は、その『定盦文集補編』に収める「番舶に与へて日本の佚書を求むるの書」で、次のように書き出している。

昔在^{むかし}、乾隆の年、皇侃が「論語疏」至れり。通^{うか}くは「佚存叢書」至れり。著す所の「七経孟子考文」も亦た至れり。海東礼楽の邦、文献彬蔚として、天朝の上は文淵（四庫全書を蔵する文淵閣）の著録より、下は魁儒碩生に逮^{いた}ぶまで、歡喜せざるもの無し。

ここでは、日本よりもたらされた殊に有益な佚書の例として、根本武夷校刻『論語義疏』、山井崑崙撰『七経孟子考文』の二書と並んで、林述斎の「佚存叢書」が取り上げられている。まして、龔自珍の用いている「文献」の語が、古文の通例として典籍（文）と賢者（獻）の意であることは、述斎の莞爾として頷^{うなず}くところである。ただ、述斎はたぶん龔自珍のこの文章を目にすることはなかったかと思われるのであるが。

『佚存叢書』の後継となったのは、明治に入って清国の駐日公使として赴任してきた黎庶昌が、部下の楊守敬の協力を得て編纂した『古逸叢書』である。日本で見いだした卷子本『唐開元御注孝經』以下二十六種について、光緒八年（明治十五年）から始めて足掛け三年がかりで全二百巻の刊行を終えた。「佚存叢書」と同じく、収められているのはいずれも古典学に有用と思われる古書ではあるが、刊刻に際して、清朝皇帝の諱を欠筆としたほか、底本の文字を改めてしまっている場合も少なからずあるらしい。したがって極論をすれば、ある特殊な一本を提供するはずのものが、実は「古逸叢書」所収本では新たな校訂本に過ぎなくなっている場合もある。そのあたり、「古逸叢書」の利用にあたっては注意を要し、長沢規矩也氏の「古逸叢書の信憑性について」（『宇野哲人先生白寿祝賀記念東洋学論叢』所収）を参照すべきである。

ちなみに言う。楊守敬が来日後の訪書にあたって、指針として便利に用いていたのが、森枳園、渋江抽斎らの『経籍訪古志』であった。当初『経籍訪古志』は上梓されておらず、楊守敬が手に入れたのも写本であったが、後年それをもとに清国公使館で印行される。そんなことから、「古逸叢書」と『経籍訪古志』との間にも十分に密接な関係があるのだが、鷗外漁史『渋江抽斎』では一言もそれに触れるところはない。『経籍訪古志』について「これは抽斎の考証学の方面を代表すべき著述で」と言い、「世間に多少抽斎を知っている人のあるのは、この支那人の手で刊行せられた経籍訪古志があるからである」とまでは言うものの（ともに『渋江抽斎』その二）、いったいに鷗外漁史は『経籍訪古志』そのものには冷淡なままで終わっている。

さて、黎庶昌らによる「古逸叢書」の刊行は、かつて『宋史』が記していた日本に「多く中国の典籍有り」ということを、あらためて中国人自身によって確認したものと言える。これ以後、傅增湘、張元濟、董康等々、書物に明るいことで知られた人々の訪書を目的とした来日が続くが、そうした中で、辛亥革命の勃発とともに日本へやってきた羅振玉の場合は、当初中国での混乱を避けるための亡命行であったが、日本での暮らしがやや落ち着くにしたが、本邦伝存の古文獻を捜求することが生活の重要な一部となっていた。かつ、羅振玉は見るを得た重要な典籍をコロタイプによって次々と刊行していったが、その古書捜求の姿勢に、従来の訪書家たちとはいささか色合いを異にするものがあつた。

これまで中国の学人が日本に古典籍を求める時、その対象となるのは、まず第一には中国で散佚した古書であつて、これは写本刊本を問うことなく重要視する。次には、佚書ではないが宋元版や日本の五山版、古活字版など、中国通行のテキストよりも精善と思われる古刊本の類である。後者の場合、刊本ではなくとも、ごく早期の写本が存在していて、古い時代の本文の面影を伝えているのならば、現行のテキストを校勘する上で目覚ましい意義を持つはずである。ところが旧時の中国読書人全体の傾向として、宋版、元版など古い版本には目の色を変えて宝蔵するものの、写本となるとさほどに貴重視はしない。これは一つには中国で宋版よりも時代をさかのぼる古い写本というものが極めて少なかったことによるであらう。古写本が学問的に問題となるほどの量を備えて出現し、人々が口をそろえてその貴を説くようになるのは、前世紀末の敦煌文書の発見以後といつても過言ではない。そのため、黎庶昌以下、過去に日本で訪書の事にあたつた中国人学者においても、写本への軽視は歴然としている。そのなかで、ひとり羅振玉ばかりは、古写本『世説新書』残卷（現行本は『世説新語』と題する）をはじめ、中国の朝代でいえば唐代に前後する頃の古写本の意義を十分に認識しており、その捜求の及ぶところ、種々の古写本をも影印普及の書目に列ねたのであつた。

さらにいま一点、これも旧時の中国読書人に通有の意識であるか、一般に俗文学あるいは白話系の作品については、どうしても輕侮の念を抜きがたい。簡単に言えば、一九一九年の五四運動を經過してからでなければ、そうした分野を研究対象とすることはなかった。そこで、たとえば『金瓶梅』研究においても、『金瓶梅詞話』が話題となるのは一九三二年に山西省で万曆序刊本が発見されてからのことで、やがて輪王寺本や徳山毛利氏本の発見につながってゆく。「三言一拍」でも、塩谷温、長沢規矩也両氏によって日本の内閣文庫等から次々と発見が報告されるのは、大正の末年から昭和の初めにかけてであった。その点、『西遊記』の源流を考える上でとりわけ重要な高山寺旧藏本『大唐三蔵取経詞話』を、辛亥革命から数年を隔てただけの頃に羅振玉が影印しているのは、時代に先んずる卓識である。日本に残る中国の古文獻について、今日までに公私の主要な所藏者について、ある程度調査が進んでいるため、殊に中国でまったく佚書となっているような書物においては、この先もはやさほど大きな発見は難しいかもしれない。しかし、内閣文庫所藏の司馬光の文集から、従来まったく知られていなかった温公の日録が見つけ出されたとの報せに接したのは、つい昨年のことである。考えてみれば、日本では比較的身近な書物でありながら中国ではかえって稀覯と成りおおせているものは、かなりの數量に上っている。唐人の別集で言えば、『昌平叢書』の『李長吉歌詩』呉正子箋註本や、『和刻本漢詩集成』（汲古書院）所収のいくつかなど、その底本となったものは中国にあって容易に見られるとはいいがたい。まして今に至るまで影印本も出ていないテキストが少なからずある以上、こと文字の異同を検する上からだけでも、日本に残存する諸本はさらなる精査を必要としているのである。

四

「日本の文献」のその二は、日本での漢文による撰著である。ここで私が念頭に置いているのは、上代の金石文から「六国史」、邦人の漢詩文集、各種の箋注等々、いわば過去に漢文で書かれた一切合財を含んでいて、『日本書紀』が渡来した中国人の手に成るかどうかといった議論はひとまず問題としない。

さて、中国の古典学に対してまず直接の貢献が認められるのは、江戸時代を中心にして大量に生みだされている中国古典への箋注である。箋注の体例そのものは中国での方式を模倣するが、中国ではどちらかといえば経書への注釈に人々の努力が傾けられていて、四部分類でいう史子集三部への注はややおろそかにされている印象がある。清朝の考証学が興って以後、清人による各種の注釈は詳審精到で知られ、今日でも古典を読むうえでの第一の手引きとされるが、鴻儒の注は経書および経書の附庸たる小学書に限られると言ってよく、ことに子部と集部への箋注は一流の学者によってまとめられたものは幾らもない。わずかに朱鶴齡に『李義山詩集箋注』があるとか、王念孫の『説書雜志』に史子部の書への箋記があるとか、例外的な一二が早期のものとして思い浮かぶばかりで、清朝も相当下ってからでないと子部への注などは出てこない。日本では幕末にあたる同治六年（慶応三年）が俞樾『諸子平議』の刊行開始であり、孫詒讓『墨子間詁』、王先謙『荀子集解』、『莊子集解』、郭慶藩『莊子集釈』等々、すべて俞樾以後の著述である。また『説苑』などに至っては、中国での注釈がまとまるのはようやく数年前のことである。こうした中国での状況に比較すれば、江戸の漢学者たちの子部集部への箋注意欲はきわめて高く、いま一つ一つの書名を列挙することはないが、同時代の清朝に見られた学問上の偏向を匡正したと言うこともでき、それら数多い邦儒の注釈はむろん今